

図書館通信 —46—

1978. 12

立場・立場

附属図書館事務部長 内藤 正

先日、館内の打合わせ会の折に、附属図書館で発行している小冊子、「図書館利用案内」について、これを改訂して、利用効果のよりよいものを考えようという提案がありました。

小冊子は、昭和52年度の本館のものは、B6版、表紙色はセルリアンブルー、字数33×行数24、文字の大きさ8ポ、書体細明朝体、上質紙、オフセット印刷、頁数32、見出しゴシック体、内容は本館の図、開館日時、閲覧室、入退館、図書の利用、資料その他を主に編集してあります。

提案は、B4版4折り、アート紙、外折り色刷、配布・利用の対象は、学生を主体とする。「学生案内」との重複はできるだけ避ける、といった事項だったと承知しています。

今まで、図書館は図書を備えてあって読書をする所と、それのみを思い込んでいた為もあって、幾つかの大学の図書館案内を、かつて入手する機会もあり、説明を受けたこともあったのですが、図書館は、利用させてもらう施設という立場もあって、関心も薄いままに、余り注意も払わずに、その種の印刷物を見過ごしておりました。

今度、図書館の機能を果たす為の組織の一員に加えられてみると、それはそれなりに責任を負わされていることの自覚とともに、図書館の機能への関心は、自ら高められることになります。

その1つの契機が、図書館発行の小冊子の改訂の提案であったのですが、幾つかの打合わせ議題を進めての合間での話でしたし、特にこの小冊子を当初から議題にしての事項ではなく、多忙の中での提案ということもあって所要経費は、別段の変更をしないことを前提としておることからも、その立場にならなければ、との思いがしております。

書籍・雑誌、それに書類とこれらの資料も個人が必要により収集して整理しておる間は、それな

りに、能率的であり効果もあると思われませんが、これが万単位、さらに10万単位ともなると、なかなか目録・分類・検索・利用の便宜となると、作業は複雑になり、仕事量は増加することになりますが、その量は、単純な増加ではなく、級数的増加を伴うとも聞いております。

反面、情報の過多に悩まされ、仕事量の整理・合理化とともに、機能の能率化もやがて、求められるようになるのではないかと考えられます。

この現実に対応して、制度、組織の面も、明治5年の書籍館設置、集書院の開館に始まり、明治19年帝国大学図書館規則が定められ、図書館令が明治32年に公布となり、昭和25年図書館法によって、現行の公共図書館は定められ、大学附属図書館は、別に一連の規則・基準で細かに規定されてはおりますが、附属図書館の図書館利用案内発行のような配慮が図書館運営の全てになされ、それを注意深く実施したときはじめて、附属図書館の機能を果たすことができるようになると思っています。

「図書館の司書は、図書を物品としてではなく、生命ある思想として取り扱うものである。……この業務は、同時に不断の学問的研究を必要とする……（国立大学図書館改善要項及びその解説昭和27年 国立大学図書館改善研究委員会）」とされている司書資格と同等の職務を内容とする者が、私どもの附属図書館には10余人もおりますので、それぞれの立場でこれらの方々を活用戴き、図書館を利用願ひ、また一方図書館内の職員は、各自その立場で図書館の機能について充分配慮されるものと信じています。

図書館を語る時、「書を読む」友を選ぶ豊かな心で、図書館を「いとおしむ」ください。今も、閲覧室には、寂静然とした学生がおります。

考古学と情報

市原寿文

9月16日 埼玉県稲荷山古墳出土の鉄剣から、6世紀代といわれる115文字の金象嵌銘文を検出。

11月4日 3世紀末～4世紀代の「古代「戦場の村」神戸市池上ノ池遺跡で発掘。

11月9日 磐田市二ノ宮第二遺跡から奈良時代の木簡出土。

11月14日 平安時代の釣糸のついた鉄製釣針、青森県三内遺跡において発見。

列記したのは次々と新聞に報道された、ごく最近の国内考古学における新発見記事である。相次ぐニュースの背景には、当然その供給源としての発掘調査が全国各地で行われていることになる。1977年中の発掘件数は5685件、これに要した調査経費総額は134億8050万7千円であるということ。「埋蔵文化財ニュース」15号(奈良国立文化財研究所文化財センター発行)はあげている。発掘調査件数は、1969年頃から増加の一途をたどるのであるが、大部分は道路・鉄道・ダム・河川・空港・大規模宅造・農業開発・土砂採集等々によって破壊される遺跡に対する「緊急調査」であって、行政機関(主として県・市等の教育委員会)に所属する専門職員の手によって行われ、個々の調査の規模の巨大化は大変なものとしかいいやうがない。そして「緊急調査」の対象となった遺跡の大部分は道路・鉄道の下に埋められ、また建設工事によって破壊され再び日の目を見ることはなく、調査記録と出土遺物だけが残されていく。こうした「緊急調査」の対象となる遺跡の中には旧石器時代～歴史時代にかけての非常に多様な内容が含まれている。

考古学におけるこのような現況を、研究者の立場でどう考えるかという点に関しては意見もあるが、主題からはずれるので一先ずおきたい。問題は、膨大な件数の「緊急調査」によって洪水のようにもたらされる新資料は、次々と「調査報告書」という印刷物となり出版されているという点にある。調査報告書の一冊一冊は、考古学における基礎資料としての性格をもっており、その他の専門書と共に研究・教育上不可欠の資料であることはいうまでもない。

全国各地でどのくらいの数の調査報告書が出版されているのかを「埋蔵文化財ニュース」14号で見ると、次のようになっている。

'73年 554冊(うち中部地方137冊)

'74年 752冊(" 177冊)

'75年 670冊(" 130冊)

'76年 752冊(" 141冊)

これらの調査報告書は、調査主体である各教育委員会ないしその外郭団体から限定部数が発行・発売され、出版社・取次店によって扱われるものはごく少ない。調査報告書の出版ニュースは、各地から次々と研究室に舞いこみはするが、いずれも販価・送料を送れという但し書きつきであり、本学図書館における現行の図書購入制度だけでは手も足も出ない。研究室として是非購入する必要がある出版案内に接して、何回となく「貴委員会発行の〇〇遺跡調査報告書を是非購入したいのだが、こちらは国立大学なので、現品と納品書・請求書等を納金前に送ってくれるよう配慮してほしい。」という丁寧な手紙を研究室名で送付してはいるものの、丁寧なところで「こちら行政機関だからそのルールに従ってくれ」という返答が来る程度で、無視される場合が圧倒的に多い。身銭を切って補ってはいるもののその量はたかがしれている。好意的に研究室に寄贈されてくる報告書は、かなり高価なものを含めて毎年50冊程度である。私たちは先にのべた考古学情報の洪水の中で、それが運よく古書店に数倍の価格がつけられて売りに出るのを、指をくわえてじっと我慢しているのが実情である。

今私たちが切望しているのは、せめて東海4県・中部山岳2県・神奈川諸地域、または中部地方の報告書だけでも整えていきたいという希望である。現行の図書購入制度の撤廃ということではなくて、他の特殊出版物と共に考古学研究室が当面している調査報告書等の情報・資料収集に対しても何らかの便法を講じていただけないかということ、この紙面を借りて図書館当局に要望しておきたい。

今のところ、国内で考古学の情報すべてを網羅している図書館は1つもないのであるが、各地域の国立大学の考古学研究室は各大学の図書館と共に今までのべたような状況を苦慮しながら情報収集の努力を進めている。それは、地域における大学の機能の一面を果していくための努力の現れでもあろうかと思われる。大学の公開講座も開始されはじめた今日、地域社会における大学図書館の在り方の問題も併せて考えていくことも必要なのではないかと思われる。(人文学部・考古学)

これから物理を勉強したいと 考える学生へ

林 弘 文

現在、私は教育学部4年生のゼミナールに*「Feynman Lectures on Physics II」を使っている。この本を使い出してから、もう何年にもなるが、いつも読了できず途中で終わってしまうので残念である。もし新入生から読みはじめて、全巻（I、II、III）を読了できると、学生にとってもどんなに良いかと思う。

この本は米カリフォルニア工科大学の1、2年生のトップクラスの学生を念頭において、フィンマン教授が行なった講義を編集したものであるが、題材が豊富であり、1963年当時の学会において話題となった問題が生々しく随所にとりあげられており、物理学を勉強しようとしてきた学生たちに強い興奮を与えたことと思われる。今日、この本を読む私にとっても強い興奮をおぼえるものである。

英語の字引をひき、計算をしながら読んでいくと、黒板の前にたってしゃべっているフィンマン教授の息づかいが聞こえてくるようである。

高等学校で物理を勉強してこなかった学生諸君にとって大学における物理の勉強はきつい事は確かであるが、この本は理路整然と話がすすめられているので、少しの努力（英語の字引をひいたり、計算する努力）をおしまずに読みつづけることができるならば、その学生にとって、この本はすばらしいものとなるであろう。中央図書館の開架式の部屋に沢山の訳本が陳列されているので、それを読んでよいが、原本を読むことをすすめたい。

物理学史的なもの、方法的なものとして、最近復刊された天野清著*「量子力学史」（中央公論社）や天野清訳編「熱輻射論と量子論の起原」（大日本出版、1933）、武谷三男著「弁証法の諸問題」（勁草書房の*「武谷三男著作集1」に再録）、坂田昌一著*「物理学と方法」（岩波書店から最近復刊）などをすすめたい。「熱輻射論と量子論の起原」は私が学生時代に読んだ本で、量子論が何故にドイツでおこり発展させられたのかという分析が社会的歴史的な面から鋭く行われており、目をみはるものであった。「弁証法の諸問題」は有名な三段階論（科学の発展は現象論的段階・実体論的段階・本質論的段階という論理的な3段階を経ておこなわれると

いう理論）が詳しく説明されている。「物理学の方法」は終戦直後の1946年頃に書かれたものが掲載されており、湯川中間子論がどのような状態の中からいかにして生まれてきたかということや、日本の中間子論研究が戦争の激化によって中断させられたこと、研究者のモラル、研究室のあり方など、戦後の解放感が生き生きと書かれている。私はこの本によって、ノーベル物理学受賞者のシュタルクがナチの手先になってユダヤ系物理学者たちの迫害に狂奔したという事実、ハイゼンベルクが収容所行きという危険の瀬戸際の中で奮闘したという事実などを知らされてショックを受けた。このほか、ガリレオ＝ガリレイの*「天文対話上・下」（岩波文庫）は古典の名著として推薦したい。古典は読みにくいし、丸山健学長が「静大だより第52号」に書かれているように、乾草をはむような苦痛を味わうが、それを我慢すれば、そこからすばらしいものを得ることができる。

物理の各分野について入門的な名著は非常に沢山あると思うが、不勉強な自分として網羅的に列挙できないので、偏った推薦を許していただくとすれば、

「ランダウ＝リフシッツ」シリーズの*「力学」（東京図書）と*「統計物理学上・下」（岩波書店）が挙げられる。「力学」は比較的薄い本であるが、力学の体系が見事に書かれている。*「統計物理学上・下」は非常にがっちり書かれていて、読みごたえがする本である。このほか*「場の古典論」は京都大学基礎物理学研究所の佐藤文隆氏（アインシュタインの重力場の方程式を解いて「富松・佐藤の解」で有名）が絶賛する本で、いつか読みたいと思っている本の一冊である。

熊谷寛夫著*「実験に生きる」（中央公論社）と*「電磁気学の基礎」（裳華房）、前者は一人のすばらしい実験物理学者が歩んできた研究活動をふり返った貴重な記録であり、後者は私たちがあまりにも当然として素通りする概念、例えば「電圧」について深い考慮が行われていて考えさせられる本である。

内山龍雄著*「相対性理論」（岩波全書）と平川浩正著*「相対論」（共立出版）。前者は現在、教育学部3年生のゼミナールに使用しているが、「この本が理解できなければ、相対論の勉強はあきらめろ」と書いている位、非常に明確に書かれている。後者は星のことについても良く書かれているので、星について勉強しようと考えている人にはチャンドラセカールの*「星の構造」（講談社）と共に良い入門書ではないかと思う。

（教育学部・物理学）

（*印は本館所蔵）

和書目録カード利用への御案内

昨年末に、和書の目録作成の典拠とする目録規則が変更になり、新たに『日本目録規則 新版予備版』（以下『新版』とする）が刊行された。

当館では、従来『日本目録規則 1965年版』を採用していたが、協議の結果、この『新版』を昭和53年4月から採用することとした。

規則の変更の主な点は、基本記入方式の廃止である。基本記入方式とは、通常著者名を基本的な標目（見出し）とし、それが難しいときは書名を基本記入の標目とし、その下に図書の記述をなすものである。図1は、“黒部貞一”が基本記入方式の標目で、その下に図書の特徴（“パルス回路、以下）を記載した目録カードである。『新版』では、図2に見られるとおり、基本記入の標目がなくなり、書名から記述を行うこととなった。標目は、1965年版の基本・副出・分出記入といった考えとは異なり、いずれも同等に扱われるようになった。従来どおり、書名・著者名・分類の必要と考えられるものは標目とし、それを訓令式ローマ字で標目の位置に表記し（図2：Kurobe, Teiiti）、その該当部分に朱線を施した（図2：“黒部貞一”の下の線）。以前に標目として記載していた「日本憲法」「日本法令」等の標目は廃止した。排列規則は『新版』に従うことにしたが、新規則によるカードと既に編成されているカードとの関係もあるので、各目録の排列法について簡単な説明を加えておきたい。

○書名目録

目録カードの排列は、ローマ字で表記された標

図1 旧版による記載

Ⓐ 549.1	開架
Ⓑ Ku 71	黒部貞一 パルス回路 黒部貞一、小川吉彦共著 東京 朝倉書店 1977 274 p 22 cm (朝倉電気工学講座8)

図2 新版による記載

開架
Ⓐ 549.1 Kurobe Teiiti
Ⓑ Ku 71 パルス回路 黒部貞一、小川吉彦共著 東京 朝倉書店 1977 274 p 22 cm (朝倉電気工学講座)

目のアルファベットの字順による。

同一標目のなかの排列順は以下のとおり。各項が同じ場合は、次の項を比較して排列する。

- (1) ①著者表示(書名に次いで記載されている)の著者名(共著の場合は最初に記載されている著者名)
- ②出版者名
- ③叢書名
- (2) 多巻ものは巻次の順(同一巻次で、一括記入カードと分割記入カードがある場合、一括記入カード、分割記入カードの順)
- (3) 同一叢書名は、巻次の順。巻次のないものは書名の順による。
- (4) 上記が同一の著作の諸版は、版次または出版年の新しいものから古いものへの順。但し、逐次的出版物は逐年順。
- (5) (1)―(4)が同一の場合、当館の図書の排架位置によって排列
 - ①指定図書コーナー(指定の印)
 - ②開架図書室(開架の印、及び第1・第2閲覧室のガイドカードのあるもの) 参考図書室(参考の印)
 - ③書庫(カードに無印)

※排架位置の印は分類記号の上、またはカードの右肩に押印してある。

○著者名目録

排列は書名目録と同様に、ローマ字のアルファベットの字順で、姓と名とは各々1単位として排列する。同一姓のときは、名の順に排列にする。標目全体が同一排列順位になるときは、片仮名、平仮名、仮名まじり、漢字(画数の少ないものから多いものへの)の順による。

同一著者のなかは、次の順による。

- (1) ①その著者の著作書名
- ②出版者
- ③叢書名
- (2)―(5) 書名目録に同じ

○分類目録

分類記号(図Ⓐ)の順により、同一の場合は図書記号(図Ⓑ)の順。

分類記号・図書記号が共に同一の場合は、著者名・書名目録の排列方式に従う。

これらの目録の検索をする時に注意する事を若干述べてみたい。

書名・著者名目録を検索する場合は、その図書

の書名・著者名を正確に覚えることが肝要で、曖昧なままで検索すると見つからないことがある。読みの判らないものについては、辞書を引いて確認するか、参考調査係に尋ねるとよい。

又、書名検索において、書名に冠称がついていたら、それだけで検索するのではなく、冠称をはずした部分書名でも探してみるとよい。(例えば、新版地質学入門は地質学入門から探す。)

外国人名で検索する場合は、原綴を調べること。(近くにある岩波西洋人名辞典などみるとよい。)

分類目録は、本来主題によって検索する目録であり、著者・書名が判っていることを前提としていないので、目録カード箱横に備付けの「日本十進分類法 新訂6-A版」にある相関索引を参考にして、主題に該当する分類記号で検索すること。該当主題を検索するばかりでなく、その主題の上位概念や、その全集・講座・叢書の中にも含まれている場合もあるので、そこを検索した方がよい。例えば、函数論 413.5 の場合、そこだけではなく、上位概念の 413 解析学や 410.8 の数学全集を検索してみるのがよいであろう。

また、特定の主題について図書を検索したい場合、その主題の研究入門書や最新版図書の参考文献や引用文献を参考にするのも一方法である。(いつれの場合も詳しい事は参考調査、運用係等、窓口の者と気軽に相談して下さい。)

■附属図書館委員会報告

第4回 とき：53・9・25 ところ：会議室

(1) 図書館の基本問題について前回より引続き、本館又は分館と図書室・資料室の関係について各部局委員よりその現状の説明があり、種々審議した。

第5回 とき：53・10・20 ところ：会議室

(1) 前回に引続いて、本館又は分館と図書室・資料室の関係について、図書館から問題点を提示してこれに対し今後検討することとした。

(2) 本館視聴覚室・演習室の利用内規について原案を承認した。

第6回 とき：53・11・24 ところ：会議室

(1) 個人貸出・備付け図書の手続・管理体制等の問題点及び学生用図書等の選定委員会の性格・構成等の問題について種々審議した。

本館演習室利用内規

- 1 静岡大学附属図書館本館演習室(以下「演習室」という。)は、図書館の資料を用い、本学の教職員及び学生のグループによる学習・研修に利用するものとする。
- 2 演習室を利用しようとする者は、別紙様式に

よる演習室利用申込書を閲覧課運用係へ提出し、その許可を受けなければならない。

- 3 演習室の利用期間は1日以内とし、利用時間は図書館の開館時間内とする。
- 4 演習室を利用するときは、その都度閲覧課運用係で鍵を受け取り、利用が終了したときは、室内を整理・清掃し、施錠の上、鍵を返却しなければならない。
- 5 演習室の設備品を利用するときは、破損しないよう取扱いに留意し、万一破損した場合は、直ちに係員に届け出なければならない。この場合、その原因が利用者の故意又は過失によるものであるときは、係員の指示に従って速やかに原状に復さなければならない。
- 6 演習室内は禁煙とし、許可なくして一切の火気を使用してはならない。

本館視聴覚室利用内規

- 1 静岡大学附属図書館本館視聴覚室(以下「視聴覚室」という。)は、本学の教職員及び学生の教育・研究に利用するものとする。
- 2 視聴覚室を利用しようとする者は、原則として利用しようとする日の1週間前までに別紙第1号様式による視聴覚室利用願を整理課総務係へ提出し、図書館長の許可を受けなければならない。
- 3 図書館長は、利用の願い出について差し支えないと認めるときは、必要な条件を付して別紙第2号様式による視聴覚室利用許可書を願ひ出た者に交付する。
- 4 視聴覚室を利用するときは、視聴覚室利用許可書を係員に提示し、その指示に従って利用するものとする。
- 5 視聴覚室の利用時間は、図書館の開館時間内とする。
- 6 視聴覚室の設備品を利用するときは、破損しないよう取扱いに留意し、万一破損した場合は、直ちに係員に届け出なければならない。この場合、その原因が利用者の故意又は過失によるものであるときは、係員の指示に従って速やかに原状に復さなければならない。
- 7 視聴覚室内は禁煙とし、許可なくして一切の火気を使用してはならない。
- 8 視聴覚室の利用が終了したときは、速やかに室内を整理・清掃の上、係員の点検を受けるものとする。

* * *

注) 両内規とも別紙様式は省略。

学生の場合は責任者(教職員)が必要。

■利用統計 (昭和52年度)

1) 利用者別統計 (本館)

単位: 冊数

区分	閲覧 出納	貸出				合計
		指定	開架	出納		
学部	人文	2,889	370	2,212	992	3,574
	教育	2,384	433	2,760	920	4,113
	理	346	693	1,171	109	1,973
	農	53	75	220	7	302
	合計	8,412	4,402	11,396	2,737	18,535
生	人文	943	316	1,058	301	1,675
	教育	985	707	1,889	156	2,752
	理	199	606	842	71	1,519
	農	62	149	302	11	462
	工	257	1,037	787	49	1,873
院生等	294	14	155	121	292	
合計	8,412	4,402	11,396	2,737	18,535	
教職員	教員	—	0	167	4,440	4,607
	職員	—	0	166	303	469
	研究室	—	—	—	9,921	9,921
合計	—	0	333	14,664	14,997	
学外者	418	—	—	—	—	
合計	8,830	4,402	11,729	17,401	33,532	

2) 分類別統計 (本館)

区分	閲覧 出納	貸出				合計
		指定	開架	出納		
0 総記	227	22	278	383	683	
1 哲学	347	149	844	1,048	2,041	
2 歴史	547	248	1,071	1,172	2,491	
3 社会	1,388	592	3,011	3,053	6,656	
4 自然	249	2,582	2,873	4,146	9,601	
5 工学	101	360	313	579	1,252	
6 産業	178	46	174	1,587	1,807	
7 芸術	83	40	600	504	1,144	
8 語学	140	98	220	815	1,133	
9 文学	1,457	265	2,345	2,044	4,654	
雑誌	4,113	—	—	2,070	2,070	
合計	8,830	4,402	11,729	17,401	33,532	

3) 延長開館中の時間別在館者数

注: ①欄は17時(土は12時)現在②欄は18時(土は14時)現在③は19時(土は15時)現在の人数。

(52年)	①	②	③	(53年)	①	②	③	(53年)	①	②	③
9/5月	84	42	19	1/17火	13	4	3	2/7火	129	77	32
6火	76	43	31	18木	39	24	11	8木	109	49	16
7水	82	45	26	19木	50	21	11	9木	102	62	20
8木	73	40	22	20金	61	28	11	10金	147	77	38
9金	101	58	18	21土	39	36	43	13月	149	75	46
10土	60	125	120	23月	71	31	13	14火	114	57	27
12月	160	95	42	24火	49	30	25	15木	103	51	34
13火	133	83	45	25木	64	43	31	16木	123	79	41
14水	133	116	63	26木	66	25	17	17金	106	56	28
16金	135	94	44	27金	87	45	19	18土	57	96	65
17土	116	158	141	28土	53	74	61	20月	79	37	19
19月	71	35	17	30月	61	42	29	21火	60	35	17
20火	126	80	31	31火	91	42	28	22木	85	38	20
21木	104	49	34	2/1木	83	38	17	23木	71	32	10
22木	59	24	17	2木	90	39	30	24金	40	15	8
24土	105	148	113	3金	78	40	18	25土	31	22	21
平均	101	77	49	4土	83	132	106	平均	80	47	28
				6月	120	50	20				

4) 浜松分館分類別統計

区分	貸出	区分	貸出
0 総記	190	5 工学	5,847
1 哲学	77	6 産業	5
2 歴史	53	7 芸術	37
3 社会	95	8 語学	35
4 自然	3,458	9 文学	272
		合計	10,069

注: 製本雑誌を含む。

■教官著作寄贈図書

山下秀智 (教養部)

「絶対否定と絶対肯定—キェルケゴールと親鸞の問題—」 山下秀智著 北樹出版 1978 (134.66 / Y 44 開架)

「キェルケゴールの宗教思想」E. ガイスマー著 山下秀智等訳 東海大学出版局 1978 (134.66 / G 32 開架)

町田英夫 (農学部)

「接ぎ木のすべて」町田英夫編 誠文堂新光社 1978 (625.12 / Ma16 農学部区)

植松 茂 (名誉教授)

「古本系江談抄注解」江談抄研究会編 植松茂等執筆 武蔵野書院 1978 (914.3 / 018 k) 上原信博 (人文学部)

「地域開発と産業構造」上原信博編著 御茶の水書房 1977 (601.15 / C 43 開架)

上野実郎 (名誉教授)

「花粉学研究」上野実郎著 風間書房 1978 (471.3 / U 45)

後藤 平 (人文学部)

「詩集無染」後藤平著 創造社 1978 (911.56 / G 72)

静岡大学山岳会

「テラム・カンリ」静岡大学カラコラム遠征隊編 静岡大学山岳会 1978 (292.58 / Sh94)

お知らせ (本館)

(1) 冬季休業中のための長期貸出

貸出冊数: 4冊まで

貸出開始日: 12月11日(月)

返却期限: 1月13日(土)

(2) 休館

12月25日(月)~1月4日(木)

(3) 後期試験のため、開館時間を延長します。

期間: 1月22日(月)~2月24日(土)

時間: 月~金 17:00~19:30

土 12:00~16:00